

I. 歓迎と振り返り

- A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。主であり救い主であるイエス・キリストを礼拝するために、皆さんと共にここに集まることができて、本当に嬉しく思います。

1. 初めてお越しの方、そしてオンラインでご視聴の皆様、ようこそ。

- B. 今朝は、子供たちを解散させる前に、数分間を割いて、主にある姉妹のために祈りたいと思います。今日はカトリンが私たちと共に過ごす最後の日曜日です。彼女が岩国での時間を締めくくり、主が次に用意してくださる道へと備える中で、彼女のために祈りたいと思います。

1. カトリン（トンプソン）さんはここ数年、この教会の仲間として共に歩んできました。多くの方々が彼女がいなくなることを寂しく思うことでしょう。彼女はヤングアダルトグループにも参加しており、一緒にいるだけで大きな祝福となっていました。
2. カトリンは特別任務に選抜され、パハマの大使館勤務に赴くことになりました。（誰かがやらなきゃいけないことですよね？）。
3. いずれにせよ、私たちは彼女と、そしてこの今後の転居のために祈りたいと思います。彼女が神と国への奉仕を続ける中で、神様が引き続き彼女の先頭に立ち、導き、支えてくださいますように。
4. （カトリンさんに立ち上がっていただき、リーダーの方々に彼女のために祈っていただくようお願いします。）

- C. 皆さんが席に戻られる間に、子供たちも日曜学校の教室へ送り出しましょう。

1. （第2礼拝：聖書英語クラスも同様）

- D. 子供たちが退出するにあたり、先週キンタイで行われた当教会の洗礼式にご参加くださった皆様へ、心より感謝申し上げます。

1. 先週の礼拝では、使徒行伝第8章から、個人的な伝道、洗礼、そして神がさまざまな人々の心を通して、失われた人々の心にどのように働きかけておられるかについて、特別な聖書の箇所を学びました。
- a. 私たちは、伝道者フィリポとエチオピアの宦官、両者の心の中で神がどのように働いておられたかを学びました。
- b. フィリポには、神が遣わされた場所へ進んで行く意欲的な心、神の御霊と調和した感受性豊かな心、大宣教命令を果たすために自分の役割を果たした従順な心、そして人生の様々な時期において主に忠実に仕えた信仰深い心がありました。
- c. また、エチオピア人の心の中で神がなしておられた働きにも注目しました。彼は主を知り、礼拝したいと願う「求める心」を持っていました。彼は、他者の話に耳を傾け、教えを受け入れる用意のある「開かれた心」を持っていました。その結果、フィリポがイザヤ書53章を通してイエスの福音を教える際、彼は理解する心を持つようになり、最終的にはイエスを神の子として告白し、キリストへの信仰の証しとして洗礼を受けたとき、信じる心と喜びに満ちた心を持つに至りました。

2. 礼拝の後、私たちは信仰を实践する機会を得て、実際に錦川へ赴き、キリストへの信仰の証しとして数名の方々に洗礼を授けました。

3. 素晴らしい一日でした。参加してくださった皆様に心から感謝いたします。

- E. さて、今朝の礼拝では、ヨハネの福音書を通した体系的な学びに戻ります。私が数週間の休暇で不在になる前まで、私たちはヨハネの福音書を順を追って学んでいました。

1. 前回の学びでは、ヨハネによる福音書第6章を終えたところでした。

2. さて、ヨハネによる福音書第6章が、主にイエスと「いのちのパン」に関する説教を扱っていたことを、覚えている方もいらっしゃるでしょう。

3. この章の冒頭では、五千人の奇跡的な給食について読みました。その後、弟子たちが舟に乗り、ガリラヤ湖を渡ろうとしたところ、激しい嵐に巻き込まれた様子が記されています。イエスは水の上を歩いて弟子たちのところへ来られ、風と波を静め、彼らを無事に岸へと導かれました。

4. 岸に着くと、大勢の群衆が彼らに追いつき、イエスにますます多くのものを求めていました。イエスのところに来た人々のほとんどは、前日の五千人の給食で食事を与えられた者たちでした。イエスはこの機会を利用して、ご自身が天からのまことのパンであり、人々のためにご自身の命を捧げるお方であることを、群衆に教えられました。

5. 「いのちのパン」に関するイエスの教えは、すべての人に受け入れられたわけではありませんでした。ある人々は、その言葉を少し受け入れがたいと感じました。イエスは人々に、永遠のいのちを得たいなら、自分の肉を食べ、自分の血を飲まなければならないと告げられたのです。イエスはこれらを比喩的に、霊的な意味で語られたのですが、多くの人々はその真意を理解できませんでした。

6. 自らをイエスの弟子だと考えていた人々の中にも、その厳しい言葉を聞いてイエスから離れていった者がいた。ヨハネによる福音書6章66節には、「それ以来、多くの弟子がイエスから離れ、もはやイエスと共に歩まなくなった」と記されている。（ヨハネ6:66）

7. そこでイエスは十二弟子の方を向き、「あなたがたも去って行きたいのか」と尋ねられました。するとペテロが答えて言いました。「主よ、私たちは誰のところへ行きますか。あなたには永遠のいのちの言葉があります。また、私たちは、あなたがキリスト、生ける神の御子であることを信じ、知っています。」（ヨハネ6:67-69）

- F. 今日の聖書箇所では、イエスに関して人々の間がさらに深く分かれていく様子を見ていきます。

1. これから見ていくように、イエスははっきりと一線を画し、何が正しく何が間違っているか、何が善であり主から来るもので、何が悪でありこの世に属するものかを明確に区別することを恐れませんでした。
2. 今朝の聖書箇所はヨハネによる福音書第7章1節から13節で、この学びのタイトルは「神殿での緊張」とします。
3. 今朝は、皆さんお手元に聖書をお持ちで、そこから読んでいただけることを願っています。もしお持ちでない場合は、遠慮なく手を伸ばして、周囲の椅子の下に置かれている聖書を

。聖書を手に入れたら、ぜひ開いて、ヨハネによる福音書第7章まで進んでください。

4. ヨハネによる福音書第7章に目を通したら、神と神の聖なる御言葉を敬うために、立ち上がる
ことができる方は、ぜひ立ち上がってください。
5. 今朝は私の聖書から、この箇所を読み上げます。私が読むのはNKJV版です。別の訳本をお読みの方
でも構いませんので、私が読むのに合わせて、ご自身の聖書でできるだけ追いかけてください。

G. 「愛する弟子」であり、この書の著者であるヨハネは、第7章1節で次のように記しています…… (R
& P)

II. ヨハネ7:1-2;

A. この箇所は、「これらのことのあと」という言葉で始まります。これは、第6章で起こった5,000人の給食
の奇跡や、イエスの『いのちのパン』に関する説教といった出来事を指しており、イエスがガリラヤを歩
まれたことを伝えていきます。

1. ギリシャ語で「歩かれた」と訳される言葉は「ペリパテオ (peripateo)」です。これは複合語であ
り、「ペリ (peri)」は「～の周囲」や「～の周り」を意味し、「パテオ (pateo)」は「踏む」を
意味します。これらを組み合わせると、イエスがガリラヤ全域を歩き回り、場所から場所へと移動
しながら、様々な人々に奉仕し、様々な必要に応じておられたというニュアンスが伝わってきます
。
2. 本文の第2節を見ると、この記述の時期を示す手がかりが与えられています。第7章に記されている
出来事は、ユダヤ人の祭りの一つ、具体的には仮庵の祭りが近づいていた時に起こったと述べられ
ています。
3. この点は注目すべきです。なぜなら、イエスがどれほど長い間、ガリラヤ地方を歩き回って
いたのかを示す手がかりとなるからです。
4. ご存じのように、第6章の冒頭、イエスが群衆にパンを与えられた直前の箇所を振り返ると、ユダ
ヤ人のもう一つの年次祭である過越の祭りが近づいていたことが記されています。
5. さて、過越の祭りは、ユダヤ教の暦の最初の月、すなわちニサン月の14日に行われます。仮
庵の祭りは、ユダヤ教の暦の7番目の月、すなわちティシュリ月の15日に行われます。
6. このことから、第6章の出来事と第7章の出来事との間の時間的間隔は、およそ6ヶ月に相当するこ
とがわかります。
7. つまり、ガリラヤ地方を巡ったこの期間には6ヶ月の時間的間隔があり、ヨハネはその間に何が起
こったかについて、詳細を記録することをあえてしていないのです。

- a. この期間に何が起こったかを知るには、マタイ、マルコ、ルカの他の福音書の記述を参照す
る必要があります。
- b. 他の福音書の記述によると、この時期、イエスはガリラヤ全域を巡回したほか、ティルスや
シドンといった周辺地域、さらにガリラヤの北にあるフェニキアや南東にあるデカポリスに
も足を延ばした。

C. この期間中、イエスは多くの人々を癒やし、再び大群衆に食糧を与えました（女性や子供を除い
て4,000人を養いました）。また、弟子たちに自身の死と復活について告げ、カイサリア・フィ
リッピの変容の山で、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの前で変容されました。

d. これらの詳細やその他の情報は、マタイによる福音書第15章から第18章、マルコによる福
音書第7章と第8章、そしてルカによる福音書第9章に記載されています。

8. 各福音書の著者は、それぞれ異なる人々を相手に、異なる目的を持って執筆していたことを忘れて
はなりません。ある著者は特定の事柄に焦点を当てた一方で、他の著者はそれを強調しないこと
を選びました。ヨハネは、「イエスがキリストであり、神の子であることを信じ、その名によっ
ていのちを得るため」（ヨハネ20:31）に執筆しました。
9. ですから、彼はすべての詳細を記録しているわけではありません。聖霊が、彼がこれらの詳細を
記録する際に、彼に与えることを選ばれたものだけを、私たちに伝えているのです。

B. さて、ヨハネがなぜこの6か月の間に起こった出来事の詳細を語らなかったのかについては明かされて
いませんが、イエスがなぜその地域を歩き回り、あちこちを巡っていたのかについては、彼は明らかに
しています。

1. 1節によると、イエスはガリラヤを歩かれた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたた
め、ユダヤ地方を歩きたくなかったからである。
 - a. ヨハネの福音書第5章を振り返ると、イエスはユダヤ人の祭りの一つに出席するためにエルサレ
ムへ行かれ、そこで安息日に麻痺した人を癒やされました。そのために、ユダヤ人たちはイエス
を殺そうとしたのです。（ヨハネ5:16）
 - b. その後、彼らは安息日の癒やしについてイエスに詰め寄りましたが、イエスは彼らにこう答
えられました。「わたしの父は今までも働いておられる。わたしも働いている。」（ヨハネ
5:17）
 - c. この言葉は、宗教指導者たちをさらに激怒させました。なぜなら、イエスは安息日に彼らが「仕
事」とみなす行為を行っただけでなく、神を自分の父と呼び、自らを神と同等であると主張した
からです。
 - d. そのため、彼らはなおさらイエスを殺そうと企んだ。（ヨハネ5:18）
2. そこで、イエスはユダヤ地方——エルサレムや神殿があり、宗教指導者たちがしばしばほとん
どの時間を過ごしていた南方の地域——から身を引くことに決めました。
3. イエスがそうされたのは、恐れからではなく、ご自身の時がまだ来ていないことを知っていたか
らです。イエスは、父の御心から外れたことをしたり、神が定められた時系列の外で何かを無理に起
こそうとしたりしたくなかったのです。
4. イエスは父に完全に従順であり、その従順さの一環として、宗教指導者たちの周りに長時間留まるこ
とを避け、神の定められた時系列から外れた行動を彼らに促してしまう可能性を排除したのです。
5. イエスは死ぬことを恐れてはいませんでした。ご自身の使命が何であるかを知っておられました。
その使命を果たすために何をしなければならぬかも知っておられました。カルバリの十字架の上
で、自ら進んで命を捧げなければならないことも知っておられました。

6. しかし、イエスは神が極めて明確なタイムラインに従って働かれていることも知っていました。イエスが宗教指導者たちの手によって十字架で死ぬことは神の御心でしたが、それがユダヤ教の仮庵の祭りの期間中に行われることは、神の御心ではなかったのです。
7. イエスは、あることが神の御心の一部であるからといって、それが今まさに私たちに与えられるべきものだとはいえないことを理解しておられました。
8. そして、それは私たち全員が心に留め、理解しておくべき教訓だと思います。
- a. 私たちに對する神の御心は、神の完璧なタイミングを待つことにつながっています。あることがあなたにとって神の御心であるとしても、それが起こるのに神が定めた時が自動的に来たという意味ではありません。
- b. あなたが昇進することが神の御心であっても、それが適切なタイミングではないかもしれませんが。あなたが結婚することが神の御心であっても、それが適切なタイミングではないかもしれませんが。あなたが退職して宣教の現場に加わることが神の御心であっても、それが神の定めたタイミングではないかもしれませんが。あなたが子供を育てること神の御心であっても、それが神の定めたタイミングではないかもしれません。
- c. あなたの人生において何かが起こることが神の御心であるからといって、必ずしもそのための神のタイミングが「今この瞬間」であるとは限りません。私たちは、主を忠実に待ち望むこと、すなわち、神が私たちの人生における御心を、神の完璧なタイミングで成就してくださるのを辛抱強く待つことを学ばなければなりません。
- d. 希望を捨てないでください。もしあなたが、神があなたの人生における御心を成し遂げてくださるのを待ち続けてきたのなら、そこで止まってはけません。引き続き、積極的に主を待ち望んでください。主は、完璧なタイミングにおいて、あなたの人生における御心を成し遂げてくださいます。
- e. 神は、イエス・キリストの日に至るまで、私たちの中で始められた御業を完成させてくださると約束されています。（**ピリピ1:6**）神は今もお働いておられます。神は今もあなたを備え、練り上げ、形作っておられます。神は今も、神の完璧なタイミングに向けてあなたを準備しておられるのです。希望を失わないでください。神があなたの中で始められた御業を完成させてくださる間、引き続き神に目を向け、神に従い、自分の人生を神に委ね続けてください。
9. これこそが、イエスが私たちに示してくださった模範です。イエスは、世の罪のためにカルバリの十字架で死ぬことが神の御心であることを知っておられました。しかし同時に、神が神の定めた時系列に従って働かれており、宗教指導者たちの手に落ちて死ぬにはまだ時期尚早であることも、イエスは知っており、理解しておられました。
- a. そこで、イエスは賢明にも、エルサレムの宗教指導者たちから離れて過ごすことを選び、その代わりに、ガリラヤとその周辺地域でほとんどの時間を過ごし、そこで父の御業と御心を行われました。
- C. また、ガリラヤにいる間、イエスは家族と共に、あるいは家族の近くで時間を過ごしました。そして、3～5節には、迫り来る仮庵の祭りに際して、イエスの兄弟たちがイエスに語った言葉が記されています。これらの節を見て、イエスと兄弟たちの間で何が起こったのかを確認してみましょう。

A. ここで本文に入り、何が起こっているのかを説明する前に、皆さんの中には衝撃を受ける方もいるかもしれませんが、まず一つ申し上げておきたいことがあります。この箇所から、イエスには兄弟姉妹がいたことが分かります。つまり、母マリアは生涯処女であり続けたわけではないということです。

1. イエスが生まれた後、マリアとヨセフの間には、他にも何人かの子供が生まれました。マタイによる福音書13章には、イエスの兄弟のうち4人の名前が挙げられています。ヤコブ、ヨセ、シモン、ユダ（ユードとも呼ばれる）です。また、イエスには姉妹が複数いたことも記されています。つまり、私たちが知っている限り、イエスには少なくとも4人の兄弟と2人の姉妹がおり、彼らは異母兄弟姉妹でした。彼らは同じ母マリアを持ちましたが、父親は異なっていました。イエスは神の子であり、その兄弟姉妹はヨセフの息子や娘たちでした。（**マタイ13:55-56a**）
2. 長年にわたり、一部の教会では、マリアはイエスの誕生後も生涯処女であり続けたと教えてきましたが、それは聖書の明白かつ単純な解釈とは一致しません。

B. さて、ここで何が起こっているのかを理解しようとするにあたり、仮庵の祭りが、すべてのユダヤ人男性が参加することが求められていた3つの必須の巡礼祭りの一つであったことを理解しなければなりません。

1. 宗教暦の初め、私たちの春の時期（3月／4月）前後に行われる過越の祭りと、種入れぬパンの祭りがありました。これら二つの祭りは、一日おきに行われるため、しばしば一つの祭りとしてまとめられてしまいます。過越祭は14日の夕方・日没前に記念され、無酵パンの祭りは15日の日没と同時に始まります。そのため、これらは一緒に祝われます。
2. 次に「七週の祭り」（一般に「ペンテコステ」と呼ばれる）があり、これはそこから7週間余りの後の、私たちの暦でいう5月～6月の時期に執り行われました。
3. さらに、「仮庵の祭り」、あるいは「天幕の祭り」、「収穫の祭り」と呼ばれる祭りがありました。これらはすべて、私たちの暦の9月～10月の時期に秋に行われる同じユダヤ教の祭りを指す、異なる名称です。
4. 申命記16章によると、ユダヤ人の男子はすべて、年に3回、主なる神が定められた場所に現れ、主を礼拝することが義務付けられていました。それは、種入れぬパンの祭り（前述の通り、過越祭と関連していました）、七週の祭り、そして仮庵の祭りです。男子たちは、手ぶらで現れないよう、主への供え物やいけにえを持って来ることを求められていました。（**申命記 16:16**）

C. そこで、これはすべてのユダヤ人が参加を義務づけられていた祭りであったため、イエスの兄弟たちは、イエスを誘い出し、この時期にエルサレムへ上って、人々の前に姿を現そうとしたのです。

1. エルサレムは神殿が建つ都市であり、ユダヤ教の世界における中心地と見なされていた。そして、仮庵の祭りの時期には、誰もがそこへ向かうことになっていた。
2. イエスの兄弟たちは、要するに、もしイエスが本当に自分が自称する通りの人物であることを示したいのなら、今が絶好の

好機だと主張していたのです。「何十万人もの人々が主を礼拝するためにエルサレムに集まる。行って、自分の姿を現し、人々に正体を明かし、自分が自称する通りの人物であることを証明しなさい。」

3. ご存知のように、イエスはそれまでガリラヤ地方とその周辺で宣教活動が続けていました。しるしや奇跡を行っていたのです。しかし、兄弟たちは要するに、イエスに「エルサレムに行つて、宗教指導者たちの前でそうしたことを行い、どうなるか見てみる」と促そうとしていたのです。
4. エルサレムとガリラヤは同じではありません。エルサレムでの厳しい監視や障害は、イエスがガリラヤで経験したものよりもはるかに厳しいものになるでしょう。
 - a. 私はこれを、まるで誰かがメジャーリーグに昇格するようなものだと考えています。確かに、マイナーリーグでは様々な素晴らしい活躍をして周囲の注目を集めているかもしれませんが、だからといって、メジャーリーグの強豪たちの中で同じことができるとは限りません。
 - b. エルサレムはまさに「メジャーリーグ」であり、イエスの兄弟たちは、イエスがガリラヤでやってきたことをエルサレムでもやってみて、どうなるか試してみると挑んでいたのです。
- D. さて、5節にはイエスの兄弟たちについて非常に興味深いことが記されています。「兄弟たちでさえ、イエスを信じなかった」とあります。
 1. イエス自身の家族、つまり異母兄弟たちでさえ、イエスがメシアであることを信じなかったのです。彼らは、イエスが神から遣わされ、神聖な使命を帯びているとは信じませんでした。イエスが行ったしるしや奇跡については知っていたものの、彼らはそれらを無視する方法を見つけ出し、イエスが真に神の子であることを信じることはできなかったのです。
 2. さて、少しその状況を想像してみてください。イエスを兄として育ったと想像してみてください。兄は通常、弟や妹から尊敬されていますが、時には少し乱暴だったり、自分の存在を主張しようとしたりすることもあります。ある種の序列を植え付けようとするのです。
 3. 私は5人の息子たちと一緒に育ちましたが、信じてください、それは現実の出来事です。しかし、イエスの場合はそうではなかったでしょう。イエスは弟たちをいじめたり、敵対したり、見下したりはしませんでした。イエスは罪のない、完璧な子だったのです。
 4. それはきっと大変だったに違いないと想像します。おそらくイエスは、何をするにも完璧な「お利口さん」として見られていたのでしょう。兄弟たちは、母親のマリアが「どうしてあなたたちは、お兄さんのイエスのようになれないの？」と言うのを聞いたことがあるのでしょうか。イエスの影の下で育つのは、彼らにとって辛いことだったかもしれません。実際のところ、それがどのようなものだったのか、私たちにははっきりとは分かりません。
 5. 確かなことは、イエスが地上で宣教活動をされていた間、十字架にかけられる前までは、兄弟たちはイエスを信じていなかったということです。彼らはイエスをメシアであり救い主として信仰を置いていませんでした。
- E. そして、そのことが私の考えを巡らせました。実はつい先日、アメリカに戻って何人かの家族を訪ねる機会があったのです。私はクリスチャンの家庭で育ったわけではなく、家族の多くも信仰を持っていません。

1. 主を知った後、もし家族の中にも、私のようにイエスに従い、イエスに人生を委ねる人がいたら、私はもっと良い証人になれたのではないかとよく考えます。
2. 時には、「もっと積極的に語ればよかった」「もっと良い証人、あるいは手本になれたはずだ」と思うこともあります。
3. しかし、そこでイエス様とご家庭、つまりご家族のことを考えます。イエス様ほど素晴らしい模範は他にありません。これ以上の証しを立てたり、これ以上に完璧な人生を送ったりすることはできなかったでしょう。それにもかかわらず、イエス様の家族でさえ、すぐに信仰を持つようにはなりませんでした。
4. このことは、救いが神と聖霊の御業であることを私たちに思い出させてくれます。
 - a. 神は私たちを用いてくださいますし、私たちは良い模範となるような生き方をし、家族や友人、愛する人たちの間で敬虔な証しを立てるべきですが、最終的にはそれは神の御業なのです。
5. 時には、家族や愛する人たちが主を知ることができなかったのは自分のせいだと考えさせられ、自分自身を責めたり、敵に責めさせられたりすることがありますが、必ずしもそうとは限りません。
6. 時には、単に時間がかかるだけなのです。それはあなた一人や、あなたの完璧な模範だけに依存しているわけではありません。愛する人の救いが完全にあなた次第だと考えて、自分を責めないでください。そうではありません。それは、彼らの心と人生に働く神と御霊の御業なのです。
 - a. 救いは、証し手の完全さによるものではなく、神の聖霊の力によるものです。
7. 私たちの生活が彼らにとっての証しや証言となることを願いますが、最終的には彼らを主に委ね、神が彼らの人生の中で、そして彼らを通して働いてくださるよう祈り続ける必要があります。
8. 勇気を出し、励まされてください。愛する人々を見捨てないでください。彼らのために祈り続け、証しを続け、彼らにとって最良の模範であり続け、主が完璧なタイミングで彼らの中に御業を成しとくださることを待ち望んでください。
9. この時点では、イエスの兄弟たちは信じていませんでしたが、最終的には彼らが心を改めたことは確かです。彼らは、イエスの死と復活の後、ついにイエスを信じるようになりました。
 - a. 使徒行伝1章14節では、これらの兄弟たちが、弟子たちやイエスの母と共に、聖霊の到来を待ち望みながら、心を一つにして祈りと願いを捧げ続けていたことが記されています。
 - b. イエスの異母兄弟であるヤコブは、一世紀のエルサレム教会の指導者の一人となり、『ヤコブの手紙』を著しました。
 - c. ユダもまた主の異母兄弟であり、新約聖書の書簡の一つを著しました。
 - d. 彼らはやがて心を改め、イエスを信じるようになりました。おそらく神は、あなたの愛する人々の心と人生においても、同様の御業をなしてくださるでしょう。彼らを見捨てないでください。彼らに証しを続け、彼らのために祈り続けてください。

祈り続けてください。彼らの救いはあなた次第ではなく、主と、主が彼らの人生に成し遂げてくださる御業にかかっていることを知ってください。

F. それでは、6～9節でイエスがご自身の兄弟たちにどのように応答されたかを見て、本文を読み進めましょう。

IV. ヨハネによる福音書7章6～9節；

A. イエスは兄弟たちに語りかけ、ご自身の時はまだ来ていないと告げられました。

1. 「時」という言葉はギリシャ語の「カイロス」であり、具体的には好機や時機を指します。ここでは、イエスの兄弟たちが言おうとしていたように、イエスが来られ、その威光を現すための好機、すなわち適切な時を指しています。
 - a. イエスがエルサレムに御自身を現すための、好機であり適切な時は来るはずでしたが、今はその時ではありませんでした。
 - b. その時が訪れるのは、過越の祭りの時期、すなわち「栄光の入城」の際に、イエスがロバに乗って町に入られる時まで待たなければなりませんでした。
 - c. その時こそ、イエスはダビデの王座から来る待望の王として、また神から遣わされた「油注がれた者」、すなわちメシアとしてご自身を現されることになるのです。
2. 今はまだその時ではありませんでした。しかし、その時が間もなく訪れるのです。ヨハネによる福音書第7章は、イエスが十字架にかけられるまでの、この地上での最後の6か月の始まりを示しています。ですから、その時が近づいているものの、今この瞬間ではないのです。

B. 興味深いことに、イエスにとってはまだその時ではなかったものの、イエスの兄弟たちにとってはまさにその時だったのです。イエスは、彼らの時は常に整っていると語られました。

1. 彼らは主や主の計画に従っていなかった。彼らは自分の好きなように振る舞い、自分たちのスケジュールで動いていたため、彼らの「時」は常に整っており、実際、エルサレムへ向かうにはいつであっても構わなかったのだ。

C. イエスはまた、世に対する姿勢や、世が彼らをどのように扱うかという点において、ご自身と兄弟たちがどのように異なっていたかについても語られました。

1. 世はイエスを憎みましたが、イエスの兄弟たちを憎むことはできませんでした。なぜなら、彼らの兄弟たちは世に属していたからです。彼らは不信仰者であり、世と世のやり方に身を委ね、それに導かれていたのです。
 - a. イエスは後に、この世に属する者はこの世に愛されると語られる。この世は自分たちと同じ者たちを愛するが、もしあなたがこの世に属していないなら、この世から憎まれることになる。
(ヨハネ15:19)
 - b. イエスは間違いなくこの世に属する者ではなかったため、憎まれたのです。
2. イエスがこの世の行いが悪であると証しされるから、世はイエスを憎むのです。
 - a. イエスは、この世を裁くため、あるいはこの世を非難するために来られたものではありません。イエスは、この世を救うために来られたのです。しかし、イエスはまた、真理を証しなさいます。イエスは、この世に明るい光として輝き、罪を暴き出されるのです。

- b. ヨハネによる福音書第3章には、次のように記されています。「神は、御子をこの世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。しかし、信じない者は

者は、すでに裁かれている。それは、神の独り子のお名を信じなかったからである。そして、この裁きとは、光がこの世に来たのに、人々が光よりも闇を愛したことである。それは、彼らの行いが悪かったからである。悪を行う者は皆、光を憎み、光のもとに来ようとしない。自分の行いが暴かれるのを恐れるからである。」（ヨハネ3:17-20）

3. 世の人々は、イエスが自分たちの生活や罪、すなわち悪行を照らし出すから、イエスを憎むのです。彼らは罪の中に留まり、闇の中に留まることを好むため、イエスを軽蔑し、拒絶し、反抗するのです。
4. この世がイエスを憎むのは、イエスが罪を、悪を暴くからである。
 - a. 見てください。この世界が間違った方向に向かい、罪と悪に蝕まれていることを理解するのに、ロケット科学者のような頭脳は必要ありません。
 - b. 今日の世界では、悪がはびこり、称賛され、祝われている一方で、神の御言葉と神の善は、現代の世界の多くの人々によって偏見や不寛容として分類されています。
 - c. 私たちは、預言者イザヤが描いたような世界に生きています。そこでは、人々は悪を善と呼び、善を悪と呼び、闇を光とし、光を闇とし、苦いものを甘いとし、甘いものを苦いとするのです！（イザヤ5:20）
 - d. パウロはローマ人への手紙第1章で、この世の人々について、彼らが神の真理を偽りと取り替えた様子を描いています。この世は欺かれています。
 - e. 悪魔は、人々を神とその御言葉から遠ざけることに大いに手を焼いています。コリントの信徒への手紙第二では、悪魔を「この世の神」と呼び、信じない者たちの心を盲目にしていると述べています。（IIコリント4:4）
 - f. この世はだまされてしまった。人々は真理を見えなくされ、サタンの嘘を鵜呑みにしてしまい、サタンは大混乱を引き起こしている。
 - g. サタンは、善を悪とし、悪を善であると人々に信じ込ませました。これは狂気です。
5. この世はイエスと、イエスが体現し、象徴するすべてのものを憎んでいます。つまり、もしあなたがイエスの側に立つなら、**この世はあなたをも憎むことになるのです。**
 - a. もしあなたがイエスのために立ち上がり、聖書の真理に立脚し、その基準に従って人生を歩むなら、この世はあなたを憎むでしょう。世はあなたを迫害し、あらゆる悪口を投げかけ、嘲笑し、偏狭で不寛容だと非難するでしょう。
 - b. もし私たちがイエスの足跡をたどり、暗闇の中で光として輝くならば、反対に直面することになるでしょう。人々は、自分の行いが悪であり罪深いと指摘されることを好まないからです。しかし、愛をもって真理を語ることを恐れてはなりません。
 - c. 私たちは選択を迫られています：
 - i. 黙って光を放たず、世の人々がまっすぐ地獄へと向かっている間も、彼らと友達になろうとする道。

ii. あるいは、イエスのために立ち上がり、闇に光を照らし、人々が間違った方向に向かって
いること、悔い改めてイエスのもとに来る必要があることを伝えるほかに、彼ら愛する
こともできます。

d. この世の人々を単に友人として望むのではなく、彼らがキリストにある兄弟姉妹となるこ
とを願うべきです。

e. 彼らが悪行から救われ、キリストの光のもとに来て、地獄と神の裁きを免れるのを見届けること
です。

D. さて、8節でイエスは兄弟たちに、自分抜きで祭りに上って行けと告げられます。イエスご自身はまた祭
りに上るつもりはなく、これもまた、イエスの時はまだ完全には来ていなかったからです。

E. 兄弟たちは祭りの場へ向かい、イエスはあと数日間、ガリラヤにとどまられました。次に、10～12節
で何が起こったのかを見てみましょう。

V. ヨハネによる福音書 7章10～12節；

A. 兄弟たちが去った後、イエスも最終的にエルサレムへ向かうことに決めました。

1. これは、イエスが兄弟たちに嘘をついたということではありません。イエスは、「また祭りに上る
つもりはない」とおっしゃいました。つまり、兄弟たちと同じ時期には同行しないという意味でし
た。

a. おそらくイエスは、兄弟たちが自分を脚光の的にしようとしたり、望ましくない注目を集める
ようなことをしたりして、自分を窮地に追い込むような状況に陥りたくなかったのでしょう。

b. 通常、こうした巡礼の祭りの際には、家族や大人数のグループと一緒に旅をするものです。
間違いなく、イエスの兄弟たちは皆、他の家族や地域社会の友人たちと一緒に旅をしていた
ことでしょう。

2. イエスは、そのような形でエルサレムへ上りたくなかったのです。大勢の目立つ集団の一員として
行くことを望まなかったのです。その代わりに、密かに、つまり目立たないように行くことを決め
ました。公然とではなく、ある程度身を隠し、群衆の中に混ざらず、群衆から距離を置いて行くこ
とを選んだのです。

3. 旅をしたのは、イエスと数人の弟子たちだけだったという印象を受けます。ヨハネは目撃者の視点
から記しているので、少なくともこの時、ヨハネはイエスと共にいたと推測しても差し支えないで
しょう。

B. ヨハネは、仮庵の祭りの期間中、エルサレムの街がどのような様子であったかを私たちに記録していま
す。空気には緊張感が漂い、群衆の間にはざわめきが広がっており、そのすべてがイエスを中心に回ってい
ました。

1. ヨハネは、ユダヤ人たちが祭りの期間中、イエスを探し求め、「彼はどこにいるのか」と尋ねて
いたと伝えています。この動詞は未完形を用いて書かれており、彼らが絶えず尋ね続けていた
ことを意味しています。

a. ヨハネが「ユダヤ人」と書く場合、しばしばに宗教的権威者、すなわちサンヘドリンの者たち
を指していることを覚えておいてください。

i. サンヘドリンは、一世紀のユダヤ人社会における最高統治機関であり、最
高裁判所でした。

- ii. それは大祭司、律法学者、長老たちからなる評議会であり、大祭司が議長を務めていました。この評議会からは、パリサイ派やサドカイ派が派生していました。
 - b. したがって、ここからは、サンヘドリンに属するこれらのユダヤ人たちが、イエスを追跡していたことがわかります。彼らはイエスを見つけ出そうと積極的に搜索しており、その理由はすでにわかっています。彼らはイエスを阻止し、殺そうとしていたのです。
 - c. 彼らは、イエスが祭りに来られることを知っていました。なぜなら、それは義務付けられた祭りの一つだったからです。そこで、彼らとその仲間たちはイエスを探し回り、「彼はどこにいるのか？ もう彼を見かけたか？ 何が聞いたことはあるか？」と周囲に尋ねて回っていました。
2. また、この時の一般の群衆についても語られています。この群衆は、イエスについて様々な考えや意見を持つ、様々な人々で構成されていました。
- a. この集団は主に、祭りのために各地からエルサレムに集まってきた人々で構成されていました。この章の後半で、ヨハネは、実際にエルサレムに住んでいたユダヤ人たちと、仮庵の祭りに参加するために各地からやって来たこの外部からの人々からなる雑多な集団とを、明確に区別することになります。
 - b. その集団の中には、間違いなくイエスのことを聞いたことがある人々もいたでしょう。もしかすると、イエスから御業を受けた人々さえいたかもしれません。中には、イエスによって癒やされたり、触れてもらったりした人々もいたかもしれません。
 - c. 彼らの多くは、「彼は素晴らしい方だ」と言いながら歩き回っていた。
 - i. 中には、イエスとの個人的な出会いの体験談を語る人もいたことでしょう。ある人は、ある日イエスが群衆に向かって説教しているのを耳にし、その教えがどれほど権威と靈感に満ちていたかを語ったかもしれません。あるいは、イエスが多くの人々の肉体の病を癒やしたり、悪霊を追い出したりするのを目撃した話をした人もいたでしょう。
 - ii. 彼らの共通した見解は、「彼は良い方だ」、「彼は主から遣わされた方だ」というものでした。
 - d. しかし、それに反対する者たちもいました。彼らは「いや、それどころか、彼は人々を惑わしている」と言いました。これらの人々は、間違いなく、人々をイエスに敵対させるよう積極的に扇動していた宗教指導者たちに影響されていたのでしょう。
 - i. おそらく群衆の中には、イエスの「命のパン」の説教を聞きに来た者もいて、イエスが自分の肉を食べ、血を飲むという奇妙なことを教えていると人々に言いふらしていたのでしょう。「いや、彼は良い人なんかじゃない。頭がおかしいんだ。人々に自分の肉を食べ、血を飲むように求めているんだ。」
3. こうして、この雑多な群衆が形成されたのです。ある人々は「彼は良い人だ」と言い、他の人々は「いや、彼は悪い人だ。彼は人々を惑わしている」と言うのです。
4. イエスについて、つまり、イエスが誰なのか、何をしたのか、どこから来たのか、なぜ来たのかなどについては、誰もがそれぞれの意見を持っています。しかし、基本的には、

人々を「イエスを信じた人々」と「信じなかった人々」の二つのグループに分けられます。

5. そして、それは今日でも変わりません。イエスについて、彼が誰であったか、何をしたか、どこから来たのか、そして彼の真意は何かといった点に関して、世の中には多くの説が飛び交っています。しかし、基本的にイエスに関して言えば、依然として二つの陣営しかありません。あなたはイエスの味方か、それとも敵か。彼が自ら語った通りの存在であると信じるか、信じないかのどちらかです。
 6. イエスご自身がマタイによる福音書12章でこう言われました。「わたしと共にいない者は、わたしに敵対する者であり、わたしと共に集めない者は、散らす者である。」（**マタイ12:30**）
 7. あなたはイエスと共にいるか、それともイエスに敵対しているか——二つの陣営しかありません。中立も、未定もありません。もしあなたがイエスの味方でないなら、それはあなたがイエスに敵対していることを意味します。
- C. 町には大きな緊張感が漂い、イエスをめぐって多くの噂が飛び交っていました。宗教指導者たちはイエスを探し出し、殺そうとしていました。大衆は、イエスを信じ、彼を善人だと考える人々と、イエスを信じず、彼が人々を欺いていると考える人々とに分かれていました。陣営が明確になり、どちらの側につくかが決められ、誰もがイエスについて語っていましたが、それは人目を避けて行われていました。最後の聖句を見て、今日の学びを締めくくりましょう。

VI. ヨハネによる福音書 7章13節；

- A. ここには、ユダヤ人たちを恐れて、誰もイエスについて公然と語らなかったと記されています。宗教指導者たちを恐れてのことでした。
1. ユダヤ人たちはイエスを探し求めていました。人々も皆、イエスのことを話題にしていたが、公然とは語りませんでした。彼らは互いに不平を漏らしていたのです。
 - a. つまり、彼らは小声でつぶやいたり、不平を漏らしたりしていたのです。イエスが何者なのか、善人なのかどうかについて議論を交わしつつも、ユダヤ人たちがイエスやその弟子たちを執拗に追跡していたため、声を大きくして話すことは決して避けていたのです。
 - b. なぜなら、ユダヤ人たちは、イエスに味方する者に対してどう対処するかをすでに決めてしまっていたからです。ヨハネによる福音書第9章には、ユダヤ人、すなわち宗教指導者たちが、もし誰かがイエスをキリストであると告白すれば、その者を会堂から追放することにすでに合意していたことが記されています。宗教的な集まりから追放され、信仰の共同体から切り離されるのです。（**ヨハネ9:22**）
 2. そのため、人々はイエスについて自分が信じていることを公然と語ることを恐れていた。「キャンセル・カルチャー」は新しい現象だと私たちは考えがちだが、そうではない。それは何千年も前から存在してきたのだ。
 3. もしあなたがイエスの側に立ち、そのメッセージを信じ、イエスが神の子であると信じたなら、あなたは断絶されることになるでしょう。共同体から追い出され、もはや会堂で仲間のユダヤ人たちと集まることは許されず、排斥されるのです。

4. そして、こうしたことは今日でも依然として起こっています。もしあなたがイエスへの信仰について声を大にして語れば、厄介な事態に巻き込まれる可能性があります。周囲の反感を買うことになり、信仰ゆえにあなたを憎む人々も現れるでしょう。
5. すでに述べたように、イエスを愛し、その教えに従うなら、この世から憎まれる可能性は極めて高いのです。イエスはこう言われました。「もし世があなたがたを憎むなら、世があなたがたを憎む前に、すでにわたしを憎んでいたことを知っておきなさい」（**ヨハネ15:18**）。
6. これは新しいことではありません。今日でも、その境界線は引かれ続けています。あなたはどちらの側に立つつもりですか？ イエスのために立ち上がり、この世からの激しい非難を喜んで受け入れるのか、それとも沈黙を守り、代わりにこの世と友となる道を選ぶのか？
 - a. イエスは、二つの主人に仕えることはできない、と語られました。なぜなら、一方を憎んで他方を愛するか、あるいは一方に忠実で他方を軽蔑することになるからです。（**マタイ6:24a**）
 - b. ヤコブは手紙の中でこう問いかけました。「あなたがたは、世と親しむことは神に敵対することであることを知らないのですか。それゆえ、世の友になりたいと思う者は、神の敵となるのです。」（**ヤコブ4:4**）
- C. ヨハネは後に、第一の手紙の中で私たちにこう勧めています。「この世も、この世にあるものも、愛してはなりません。もしだれかがこの世を愛するなら、父の愛はその人の中にはありません。」（**ヨハネの手紙一 2:15**）
7. 二つの側面があります。両方に属することはできません。この世を愛し、この世の道に従おうとしながら、同時に主を愛していると主張することはできないのです。私たちは明確な選択をし、イエスに絶対的な献身を捧げ、この世の道を捨て去らなければなりません。
8. 祈りましょう。